

第五回星野立子新人賞

「朝な夕な」

秋山 夢

初蝶に絡む風あり潮臭し  
轉のどこか青きの混じりたる  
足あとに影の生るや土匂ふ  
花冷の鏡を覗く文鳥よ  
みづうみに浮く塵芥残る鴨  
春水や湧くともなしに雲広がる  
掌に鼻ちやうちんの子猫かな  
猫の子にじやれつかれたる聴診器  
追風に毛の乱れたる雀の子  
海見ゆる丘よ雀の鉄砲よ  
正体が雀隠れを食み出たる  
すぐそばに鴉鳴きゐる毛虫かな  
黙々となんじやもんじやの木が青葉  
今日の雲レモンの花を濡らしたる  
どくだみの荅華やぐ空家かな  
老鶯に蟹の出てくる蟹の穴  
羊歯鬱蒼と海近し梅雨近し  
千年の杉に纏はりつく蚩  
しんがりよ青葦原へ入る列の  
白靴で来て白靴で帰るのみ  
野良猫を手懐けてゐる白靴よ  
夏の日の鴉の臉青白き  
気配して仏法僧に見つめらる  
海鳴りと山鳴りと聞く昼寢覚  
釣針を海猫から外しやる仕事

金蠅たかる張りの良き馬の尻  
孟宗の夜は明るし金亀子  
戻り来し人に花火の匂ひ濃し  
佇めば麝香揚羽の一羽二羽  
精霊蜻蛉潮に傷みし草の上  
秋水に研かれてゐる鷺の嘴  
かたわれのかはたれどきの鶉鳴く  
葦そよぐ朝な夕なの穂絮かな  
コスモスに土竜が顔を出すところ  
塩水と真水混じれる十三夜  
秋深く先ゆく鯉の泥けむり  
紅葉且つ散る新顔の鳩のゐて  
白く白く抜け羽白し火恋し  
神の旅中州に辿り着く一羽  
山茶花や声逞しき馬が傍  
木枯にもぬけの殻の貝並べ  
夜の雲の毳立ちてゐる青女かな  
木今宵冷たき星の宿りけり  
鷹狩の鷹に驚く只の犬  
初雪と記す入院記録かな  
夜咄の猫は尻尾で応へたる  
老犬のための湯婆湯を沸かす  
雪兎大方は聞き流しをり  
諍ひはすぐにお仕舞い寒雀  
犬の子の跳ねて転げて日脚伸ぶ